

もっと教育的に条件付き採録を！ もっと光が来るように More Educational Conditional Acceptance! So That More Light Comes in



北陸支部長 菊島浩二

【会員の皆様，論文の査読を依頼されたときには，リジェクトするよりも，もっと教育的に条件付き採録にして下さい。】

私が若い頃には，全国大会で発表して，頂いた質問・コメントを反映させて論文投稿すると，条件付き採録になり，出版されました。

しかし，ここ10数年，予算の削減が厳しく，大会への出張・発表が困難になり，質問・コメントを頂く機会を失いました。大会の発表なく，突然の論文投稿では，内容が精査できず，その結果，リジェクトされます。リジェクトされれば，自然と，他の学会に投稿します。これが，電子情報通信学会の会員数の減少につながります。

条件付き採録であれば，会員の研究活動も方向性が見えて活性化されます。

私の知る限り，会社の後輩，学生たちは，皆，学会発表のために学会に自費で入会します。それ以外は皆無です。海外からも含め，若い方々の論文投稿に対して，もっと教育的に条件付き採録にして下さい。

IF（インパクトファクター）の向上を目的として，査読を厳しくしたいという意図は理解できますが，間違っています。

欧米の論文誌が扱っていない研究テーマのとき，「こんな論文，読む人がいない。読む人がいなければIFは向上しない。」との理由でのリジェクト。それは，間違いです。どんな画期的な技術も，初めは，理解されず，相手にされないものです。

「こんな技術，誰もやっていない。誰も取り組んでいない。自分が出席している研究会では扱ったことのないテーマだ。だから読者は興味を持たない。」との理由でリジェクト，それも間違いです。

「難しすぎる技術で，本当に実験は正しいのか。嘘に違いない。」との理由で，リジェクト。間違いです。

私の論文から普及した技術の1件目では，査読者から，「分からない」と言われました。それでも，査読者に丁寧に説明して，条件付き採録となり出版されました。しかし，多くの方々から，「こんな技術は現実的ではない。役に立たない。」と言われました。2件目の条件付き採録で出版された技術では，「本当にできたのか」と驚かれ，国内外から研究室に多くの見学があり，また，国内外の展示会にも出展し，多くの方々に御覧頂きました。3件目の条件付き採録で出版された技術では，「誰もこんなことをやっていない。今，はやりの技術ではない。こんな技術は難しすぎる。実用化に向いていない。」と言われました。

1件目の技術は光通信システムの統計的設計法で，現在，国際標準（ITU-T G-series supplement 39）に採用されています。2件目はAMアナログテレビ映像とデジタルテレビ映像のサブキャリアや多重CATV信号を光増幅する技術で，国際標準（ITU-T J.186）になり普及しました。3件目はFM一括変換で，国際標準（ITU-T J.185）になり，現在，236万世帯を超えるほどに普及しました。いずれも，論文の出版から技術の普及まで，15～18年かかりました。

私は，条件付き採録でのコメントを通じて，学会から多くのことを学びました。リジェクトされていたら，学ぶ機会を失い，学会を辞めていたことでしょう。

会員の皆様，論文の査読を依頼されたら，できる限りリジェクトしないで，海外からも含め，若い方々の論文投稿に対して，もっと教育的に条件付き採録にして下さい。

このことが，学会に学びの場を取り戻し，会員数の減少に歯止めをかけ，学会の継続と発展につながると考えます。